

20094

レーザー血流計を用いた術中血流モニタリングの有用性について

【目的】末梢血管インターベンション術中におけるカテーテル治療室内での治療効果およびエンドポイントを決める指標は、血管内超音波や血管造影による評価であり、客観的評価を行うことができていないのが現状である。当院では、末梢血管インターベンション術中にレーザー血流計を用いて血流量をリアルタイムに計測を行っている。術中に起こりうるトラブルの早期発見、治療効果およびエンドポイントを決める客観的評価として用いることが有用であるか、症例を提示し報告する。**【方法】**レーザー血流計 CDF-2000(ネクシス社製)を使用し、治療開始前よりセンサープローブを足底部、足背部の2点に貼り、治療終了までの血流量(ml/min/100g)を計測した。測定原理は皮膚表面から深さ3mm程度の血流をレーザー光の反射におけるドブラーシフトを用いることで測定を行なっている。血流量は個人差があるため、治療開始前の血流量を基準値とし、治療終了までの血流量変化を連続計測した。**【結果】**術中に血流量の低下がある場合は何かしらのトラブルが示唆された。血流量の増加が得られない場合は治療の追加を行い血流量の増加を得ることが可能であった。**【総括】**足底部、足背部の血流量には個人差があり、絶対値は不明である。患者ごとに治療前から治療後まで血流量を連続的に計測することにより、血流量の変化をリアルタイムに確認でき、治療中に起こるトラブルや合併症を発見できる。また、治療時のエンドポイントを決める客観的評価として用いることが有用であると考えられる。